大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

カオスと組織：ハンナ・アレント研究(4)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 亀喜, 信 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00011253

論　文

カオスと組織

――ハンナ・アレント研究（4）――

亀喜　信

アレントにとって、ナチス・ドイツによる全体主義運動の出現は、歴史の断絶と呼ぶべき出来事であった。その断絶に深く関わるのが「大衆」というカオスの出現であり、ナチスはこのカオスを組織することによって政権に就いた。そのためにナチスが用いたのが、人種イデオロギーという虚構であった。なぜ大衆はこの虚構を信奉し、ユダヤ民族の絶滅を計画し、実行するに至ったのか。アレントは、最初の纏まった著作である『全体主義の起源』(1951) において、この問題に取り組んだ。本論文は、この著作を中心に、アレントが全体主義運動についてどう論じているかを、大衆の世界疎外との連関から考察する。全体主義については、その組織形態、指導者（独裁者）の地位、エリートと官僚制などとの連関からも論じる必要があるが、本論文では立ち入らない。

大衆と社会

シグマンド・ノイマンは、「大衆」という抽象的概念は、具体的な歴史的背景に照らして初めて明確な意味をもつのであり、時代が異なれば性格も機能も異なると述べている[1]。アレントが論じる大衆とは、ヨーロッパにおいて、ブルジョワが支配する階級社会の没落したあと、長きに亘る大規模な失業と人口増加に伴って生じたものであり、自らが「余計である」(superfluous) という感覚を持っている。そして彼女は、大衆という用語が、「数が多すぎるか無関心か、あるいはその両方によって、共通の利害に基づくいかなる組織（…）にも統合されることのできない人々」について当てはまると述べている (OT,311)[2]。ヨーロッパでは、18世紀末に産業革命が起き、19世紀から20世紀にかけて、多くの人が労働力として都市に移り住んだ。膨大な人口が都市に集中し、そこでは人々のあいだの結びつきが希薄となる。人々は利害や目的を共有して互いに結びつくこともなく、生きることに追われる。それまでの政党は、階級など共通の利害を持つ集団を代表するものであった。しかし社会の圧倒的多数が、政治的に無関心で中立であり、共通の利害に

よって統合されない大衆となったとき、政党はその支持を失っていった。ナチスはこの大衆の支持を集めたのであり、アレントは、「全体主義運動とは大衆を組織することを目論み、それに成功するものである（…）」と述べている（OT,308）。しかしなぜ大衆は、全体主義運動によって組織されてしまったのか。

ノイマンは、大衆民主政の出現と伝統的諸制度の崩壊が政治に危機をもたらし、独裁政治が出現する歴史的前提となったと論じている。19世紀から20世紀にかけて参政権が拡大し、大衆民主政が現れ、大衆国家におけるリーダーシップが大きな問題となる。またこの時期、工業化と都市化により、社会が大きな変貌を遂げつつあった。伝統的な制度が機能しなくなり、大衆は既存の秩序に不満を抱き、新たな制度の確立を訴える指導者を求める。そして第一次世界大戦がこの危機的状況に拍車をかけた[3]。さらにアレントは、近代における社会の変化を、政治の経済への従属、あるいは公的領域と私的領域の境界の消失という観点から捉える点に特徴がある。

アレントは、私的な利害が公的な重要性を帯びる雑種的領域を「社会」と呼ぶ（HC,35）。つまり「社会」とは、「生命のためだけの相互依存という事実が公的重要性を帯び、単なる生存と結びついた活動が公に現れることを許される形態である」（HC,46）。そして彼女は、この厳密に私的でも公的でもない「社会」という領域が、比較的新しい現象であり、その起源は近代の出現と一致すると述べる（HC,28）。つまり彼女は、西洋近代における市民社会の成立こそ、私的利害（生命の維持と再生産）が公的領域を浸食する条件であったと見なしている。さらに彼女は、「社会」が公的領域と私的領域をともに浸食するものであることを強調する。「公的領域と私的領域とを分かつ線は、完全に消えてしまった。なぜなら私たちは、人々と政治的共同体との総体を、家族のイメージで見るからだ。その日々の営みは、巨大な国家規模の家政（管理housekeeping）によって処理されねばならない。」（HC,28）「社会」は、人々を労働力という単一の機能として組み込み、ただ一つの意見と利害を持つ巨大な家族のように行動するよう求める。そこでは、資本の蓄積が究極の目的であり、そのための効率主義（早く、たくさん、正確に）が個人の資質として要求され、合理的な命令系統を持つ組織が形成される。「社会」は個人に対して、組織に溶け込むように「平均化の要求」（leveling demands）を突き付け、「順応主義」（conformism）を蔓延させる（HC,39）。この平均化の要求が私的領域を掘り崩す。「近代におけるプライバシーは、政治的なものに対立すると同じくらい鋭く、社会の領域に対立している（…）。歴史的に決定的なのは、近代のプライバシーは、親密なものをかくまうという最も重要な意味においては、政治的なものの反対としてではなく、社会的なものの反対として発見されたという事実である（…）。」（HC,38）アレントの言う「社会」とは、人間の独自な存在を平均化して均一な労働力として組織し、それによって資本を蓄積するために際限なく市場を拡大していく自動機械に他ならない。

近代社会において、人々は均一な労働力として組織される。しかし労働者は、組織されている

と言っても、あくまで生きるために（食べていくために）働くのであり、自ら目的を設定し、その目的を共有して互いに協力するために、主体的に組織を形成するのではない。協力とは、人々が共通の目的のために自発的に力を合わせることであり、協力しあう人々は命令や強制によってではなく、理解と合意に基づいて結びつくものである[4]。労働力として組織された人々は、共有する目的を持たず、協力しあうことができない。その状態をアレントは「孤立」(isolation) と呼び、その目印は無力 (impotence) であると述べる (OT,474)。大衆とは、目的を共有し自らを主体的に組織することのできない、孤立した無力な人間の群である。そして大衆社会とは、大衆が目的や意見を共有することなく、私的利害によってのみ組織された社会である。「大衆社会とは、いまだ互いに関係づけられてはいるが、かつて全員に共有されていた世界を失った人間のあいだに、自動的に打ち立てられる組織化された生活に他ならない。」(BPF,90)[5]

アレントは、西洋近代における「社会」の出現とともに、人間の活動は労働と消費へと一元化され、人間は他者と共有された持続的な「世界」を失っていったと考える。「社会という視点は、人間の生命過程しか考慮に入れない解釈と同じであり、その準拠枠の中ではすべての事物が消費の対象となる。(…) あらゆる事物は、世界における客観的性質 (worldly, objective quality) においてではなく、労働力の結果として、また生命過程の機能として理解されるだろう。」(HC,89) 「社会」において、人間の活動は生命維持を中心とする私的利害の追求（これをアレントは労働と呼ぶ）へと画一化される。そこでは人間は、人々との交わりの中で、自らの独自の存在を他者に伝え、互いに理解しあうことができない。それは人間が、意味という次元を失うことである。なぜなら意味とは、私的なものではなく、人々によって共有されて成り立つものだからである。他者によって自分を理解されることなく、つまり自分が生きる意味を見失い、均一な労働力に還元され、人間は孤独である[6]。大衆とは、孤独な人間の群である。その孤独から救い出すかに見えるのがイデオロギーであり、全体主義運動はイデオロギーによって大衆を組織する。「共有された公的世界の凋落は、孤独な大衆 (lonely mass man) の形成に決定的であり、近代のイデオロギーによる大衆運動の無世界的精神性 (worldless mentality) の形成において極めて危険なものであった (…)」(HC,257)。それでは、ナチスはいかなるイデオロギーによって大衆を惹き付けたのか。またイデオロギーによって生まれた「無世界的精神性」とはなにか。

イデオロギー——経験と思考との破壊

全体主義運動は、大衆を組織するためにイデオロギーを用い、その原理はナチの「人種」であり、ボルシェビキの「階級」であった。生命のためだけの相互依存が公的重要性を帯びる「社会」において、大衆を組織するには、例えば人種のように、一見したところ客観的な特徴に基づくと

思われる基準が用いられる。しかしそれは、人間を生物という次元に還元する極めて恣意的な基準である。「人種という言葉が正確な意味を持ったのは、人々が歴史的記録を持たず、また自らの歴史についてまったく知らない部族に出会ったときであった。(…)その部族を他の人間と異なるものとしたのは、皮膚の色ではなく、その部族が自然の一部のように振る舞い、(…) 人間的な世界や人間的なリアリティを創り出していなかったことである。」(OT,192) 人間を人種という次元で捉えることは、人間から歴史の次元を奪うことである。個々の人間は、生まれてからのそれぞれの歴史を担うがゆえに、独自な存在として在る。また人々は、言語や慣習、伝統など、過去から伝えられてきたものを受け継ぎ、共有することによって（また時にそれを拒絶し、作り直すことによって)、人間的な交わりを営む。歴史という次元に基づいて、個々の人間の独自な存在や、人々が共有する意味という次元が保たれる。アレントは、人間にとってリアリティとは、個々の事実やその総体ではなく、「語られること」であり、物語のなかでのみ個々の事実は連関づけられ、人間に理解可能な意味を与えられると述べている (BPF,261-62)。人種というフィルターを通すと、人間は歴史の次元を失い、自然の一部である生物として扱われ、ヒトという生物種の下位区分として分類される。個々の人間の独自な存在は無視され、人々が意味を共有し、相互に理解するという次元は消失し、「人間的世界」「人間的なリアリティ」が成り立たなくなる。「人種」という次元で人間を区分けすることは、人間を物質代謝する生物種（ヒト）に還元することであり、「社会」という近代に生まれた領域に適合している[7]。

しかし、なぜ大衆は全体主義のイデオロギーを信奉し、組織されたのか。その理由の一つとして、第一次世界大戦の経験が挙げられる。第一次大戦は、それ以前の戦争とは比較にならない数の人間が命を失った、総力戦であった。人間は個人としての価値を認められず、戦力として消費され、無差別に殺される。自由で平等な個人という前提に立つ近代社会の規範や秩序は、戦争のさなかに顧みられることはない。前線で戦争を体験した世代にとって、戦争が終わった後、旧態依然の市民社会の価値秩序のうえに進められる政治は、偽りとしか映らなかった。「前線世代は、(…) 見せかけの安全、見せかけの文化、見せかけの生活から成るこの世界全体の崩壊を見るという欲望に完全に取り憑かれていた。(…) 手加減なしの破壊、カオスと崩壊そのものが至高の価値として君臨していた。」(OT,328) 全体主義運動の提示するイデオロギーは、少なくとも既存の価値秩序（人間の自由、平等、尊厳など）の偽瞞性を暴き、批判するものであった。またそのイデオロギーは、行動主義であり、歴史の必然性の圧倒的な力を強調するものであり、それらは前線世代の戦争経験に合致するものであったとアレントは述べる (OT,331)。[8]

また、大衆が政治的組織を求めた二つ目の理由として、人々が他者との結びつきを失い、拠り所なく生きることに耐えられなかったことが挙げられよう。アレントは、「全体主義運動は、何らかの理由で政治的組織への欲求を身に付けた大衆の存在するところなら、どこでも可能である。」

（OT,311）と述べている。大衆が、自らを組織する共通の利害を持たないにも拘わらず、「政治的組織への欲求」を共有するとき、全体主義運動が可能となる。常識（共通感覚）は、他者と共有されてこそ拠り所となる。他者との結びつきを失い、常識を拠り所にして生きることのできない大衆は、不透明で流動的な現実に対処できず、不安を抱く。そこで、「仲間でないものは敵である」といった単純で理解しやすい虚構を望む(OT,380-81)。全体主義運動の提示するイデオロギーは、歴史を特定の原理ないし法則に基づいて論理的に説明するものであり、この原理ないし法則そのものは歴史を越えたものである。例えば人種という原理は、歴史や文化の共有に基づくものではなく、互いに共有するものを失った大衆であっても、自分を特定の人種に帰属させることができるように思われた。大衆は、イデオロギーによって自分の存在という事実の理由を与えられ、自己喪失感から解放され、世界のうちに場所を与えられた。いかに虚構であっても、それによって世界の内に場所を与えられる限り、大衆は現実より虚構を選択する。アレントによれば、それは大衆が愚かだからではなく、この逃避によって最小限の「自己への尊重」(self-respect)を保証されるからである（OT,352)。人々の持つ「政治的組織への欲求」とは、世界の内に自分の場所を与えられたいという欲求であり、「自己への尊重」への欲求であろう。大衆は「自己への尊重」を求めて、イデオロギーを信奉する。逆に全体主義運動は、大衆を完全に孤立させることにより、人々の求める「自己への尊重」を一手に独占し、大衆の無制限で全体的な忠誠を手に入れる。

全体主義運動への帰属によってしか自分の場所を与えられない大衆は、もはや自らの経験によってイデオロギーの妥当性を批判することができない。「運動の組織された枠組みのなかで、熱狂したメンバーたちは経験によっても議論によっても動かされることができない。運動と一体化し、どっぷりと順応主義に染まって、経験をするという能力そのものが破壊されてしまったように見える。苦痛や死の恐怖のような極端な経験でさえも。」（OT,308）事実や経験は、イデオロギーによって説明される二次的な事柄でしかなくなる。イデオロギーは、特定の原理からの論理的演繹によって一方的に歴史や経験を説明するのであって、その原理自身は超歴史的であり、個別の経験によって修正されたり検証されたりする必要はない。アレントは、公理ないし自明の命題からの演繹や、一般規則のもとに個別の出来事を包摂する場合に示される論理的推論を、思考や認識の働きと区別する（HC,171)。論理的推論は、現実世界から独立に、精神の内部で行われるものであり、人によって異なることが許されない強制的なものである。平面上の三角形の内角の和が180度であることは、現実の世界に三角形が存在しなくても、論理的推論能力を持つあらゆる存在にとって真である。それゆえアレントは、論理的で強制的な過程は「無世界的」であると述べる（HC,172)。イデオロギーは、経験の背後に隠された「より真なる実在」(truer reality)すなわち原理からすべてを論理的に演繹し、われわれが五感によって経験する現実を説明する

(OT,470)。自然淘汰の法則や階級闘争こそが「真の実在」であり、われわれの経験する現実はその現れに過ぎない。イデオロギーというフィルターを通して現実を解釈することにより、人間は現実に直接触れ、感じる能力を失う。また個々の出来事の意味を多様な視点から反省する能力を放棄する。「テロルが人間のあいだのあらゆる関係を破壊するように、イデオロギー的思考の自己強制は現実とのあらゆる関係を破壊する。(…) 人間は、周囲の仲間や現実との接触を失うとともに、経験と思考との能力を失った。全体主義的統治に従属する理想的な人間とは、(…) 事実と虚構との区別 (経験の現実性) も、真と偽との区別 (思考の基準) も、もはや存在しない人々である。」(OT,474) 大衆は、経験し思考する能力を放棄し、イデオロギーの虚構性から目を逸らす。それが「自己への尊重」を取り戻し、自分の存在する意味を与えられる代償であった。

イデオロギーという論理的に一貫した体系のうちには、個々の人間の自由や自発性が認められる余地はない。事実は原理から論理的・演繹的に説明され、個人はその論理に従って動く歯車となる。人間は、イデオロギーによって自己喪失感から解放されるように見えても、現実にはいっそう自己を失っている。なぜなら、人間が独自な人格として現実に存在するためには、「私と平等で、私が信頼でき、また私を信頼してくれる人々と共に在ること」(trusting and trustworthy company of my equals) が必要だからである (OT,477)。互いに信頼できる人間関係とは、行為や発言を通して互いに自己自身を表現し、理解しあえるような関係であり、命令や強制によってではなく、説得と同意に基づいて結びつくような関係であろう。人間の独自な存在は、当人がそれ自体で意味があると判断する行為や発言のうちに現れる。しかしその独自な存在は他者にしか現れず、他者によってしか理解されない。「行為と発言の内に、人間は自分が誰であるかを見せ、自分の独自な人格のアイデンティティを能動的に示す。(…) しかし、自分が誰であるかということは、(…) それを所有し自由に処分できるかのように、意図した目的として露わにすることは殆ど決してできない。逆におそらく、人が誰であるかは、他者にこそ明瞭に誤ることなく現れるのであり、その当人自身には隠されたままであろう (…)。」(HC,179) 私を自己喪失感から救い出してくれるのは、私の行いを見、私の発言を聞き、私を理解してくれる他者の現前である。またそのような他者の現前を信じるからこそ、私はなにかを始めることができる。それに対し、イデオロギーの前では人間は歯車であり、独自な存在を持たない。また同じイデオロギーを信奉する人々は、互いを信頼しているわけではない。イデオロギーがすべてを説明する理論である限り、その世界には自由や自発性は存在しない。すべてが論理に従って「必然的に」進行するとき、そもそも他者を信頼する必要などない。イデオロギーは現実を越えた原理によって人間の営みを説明するだけであり、個々の現実の人間の独自な存在を理解することはない。

アレントによれば、全体主義のイデオロギーのもつ論理的一貫性が現実の世界のものではなく、虚構であるということは、共通感覚によって知られる。「共通感覚は、(…) 私の私的な五感

の感覚を、他者と共有された共通の世界へと適合させる」(LM-I,50) はたらきであり、あくまで感覚に現前する世界に密着したものである。それゆえ共通感覚は、リアルな事実の持つ、偶発的で予測できない面を露わにする。しかしアトム化された社会のうちで、世界に於ける場所を失った大衆は、偶発的で予測できないリアリティに耐えられない。それよりも、一貫性を持ち、すべてが説明される虚構の方が、大衆に拠りどころを与えてくれる。(OT,352) 共通感覚は、あくまで「他者と共有された世界」へと私的感覚を媒介するものである限り、「共有された人間関係」(communal relationships) の存立を条件とする。アトム化された社会においては、この共有された人間関係が崩れており、共通感覚は機能できなくなる。そこで大衆は、共有された人間関係の失われた空間の内で、自分に場所を与えてくれるイデオロギーに縋り付く。他者と共有された人間関係の内で、はじめて共通感覚が息を吹き返し、人間は他者と共有された現実の世界を取り戻し、イデオロギーの虚構性を見分ける力を取り戻す。逆に全体主義は、共通感覚を封殺するため、人間の結びつきを断ち、孤立させようとする。そのための装置が強制収容所であった。

テロル——人間の破壊

「共有された人間関係」を絶たれたとき、人間は世界の内に場所を持つことができない。それをアレントは「根を失うこと」(uprootedness) と呼んだ。世界における根を失ったとき、人間は自らを「余計な」(superfluous) 存在としか感じられず、孤独である (OT,475)。アレントは『全体主義の起源』のなかで、大衆が自分を余計者として感じ、自己への関心を徹底的に喪失していることに、繰り返し言及している (OT,307, 311, 315-16, 475)。それは、この大衆の自己喪失感が、全体主義運動の成立に不可欠の条件であったからに他ならない。全体主義の統治は、人々が他者とも世界とも結びつきを失い、孤独な存在となるとき、絶対の支配力を持つ。人間の孤独を完全なものにするのが、強制収容所というテロルの存在である。このテロルの特徴は、収容所に連行される犠牲者の選ばれ方がまったく恣意的であり、犠牲者が何をしたか (しなかったか) に関わりがないことである (OT,6)。無実であっても、いつ収容所に連行されるか分からない。まるで、いつ大地震が起きて自分が命を落とすか分からないように。このテロルに対し、個人はまったく無力であり、為す術がない。どうすることもできない「必然」として受け入れるほかない。自分の家族や親しい友人が収容所に連行されても、自分にはどうすることもできないし、また自分が連行されたときも、家族や友人にすら助けを求めることは無意味である。そのような状況におかれるとき、人間は「共有された人間関係」を断念するほかない。

強制収容所に連行された人間は、社会とのあらゆる結びつきを断たれ、その記憶すら、社会に残された人々の間では封印される。犠牲者は、人々に共有された現実の社会の中に、いかなる痕

跡も残さない。全体主義運動は、強制収容所によって人間関係を破壊することにより、世界における人間の存在(人間の世界性)そのものを消去する。それをアレントは「根源的悪」(radical evil)ないし「絶対の悪」(absolute evil) と呼び、人類そのものの存在を消し去る力を持つ原爆に準えている (OT,443)。殺される人間の数が問題なのではない。人間関係そのものを破壊することは、個別の法に違反することとは次元がまるで異なる。アレントは、その悪は怒りによって復讐することもできず、愛によって耐えることもできず、友情によって赦すこともできないと述べている (OT,459)。なぜなら、復讐したり罰したり赦したりすることは、人間関係の内部で行われるのであり、人間関係そのものを破壊する根源的悪は、罰したり赦したりする対象とはなり得ないからである。人間は、赦そうにも赦しようのない悪を犯してしまった。人間は、この歴史的事実を背負って生きていかなければならない。歴史を消去し、過去の次元を放棄することは、人間であることを止めて生物としてのヒトになることだからである。「人間の世界」が歴史の次元を持つことによって初めて成り立つものである限り、私たちはこの根源的悪を担い、繰り返し想起し、語り、それが何であったのかを理解しようとする営みを続けなければならない。

『全体主義の起源』には、あらゆる政治体から放り出された膨大な数の難民が、「無権利状態」(rightlessness) として描かれている。そして「人権」(human rights) についても論じられており、それは財産の権利や言論の自由といった、市民に与えられる個別の権利ではなく、そもそも市民として政治体の中に場所を持つ権利として理解されている。難民とは、この「市民という地位」としての人権を喪失した人々であり、また全体主義が破壊するのも、市民に認められる個別の権利ではなく、市民という地位そのものである (OT,296-97)。人権を奪われるとき、人間は人間として生きることができない。なぜなら人間は、互いに平等な人間の関わりの内で、初めて行為し、発言することができるのであり、自由な存在として生きることができるからである。アレントは、「ナチもまたユダヤ人絶滅を始めるにあたり、ユダヤ人の法的地位を奪い、生ける者の世界から切り離した。生きる権利が奪われる前に、完全な無権利状態が生み出された。」(OT,295-96) と述べている。そして全体主義のテロルは、ユダヤ人にとどまらず、あらゆる人間に拡大されていった。全体主義は運動であり、停止することがなく、今日を無事に過ごした人も、明日に自分の身がどうなるかは分からない。この絶対の無力感が人間の自発性を根絶やしにし、完全な孤独のうちに閉じ込める。

全体主義は、人権というものを破壊して見せた。つまり人権は、人間が生まれながらに持ち、いかなる力によっても奪われないような「自然」ではない。人間は、互いに平等な存在として尊重しあう人間関係 (人為) のうちで、初めて人間として在ることができる。それゆえに、この人間関係からいつでも私を切り離すことのできる力は、圧倒的に恐ろしいものである。ナチは大衆を組織したが、それは人間のあいだの結びつきを完全に破壊することによって、人間を歯車に変

え、それを組み立てて時計を作るような作業であった。

結　　び

自由で平等な人間という地位は、その地位を互いに認めあう人間関係のうちでのみ成立する人為であり、虚構である。その人間関係を破壊すれば、人間はモノに戻り、モノとして処分される。全体主義運動は、大衆というカオスを人種イデオロギーによって惹き付けたうえで、強制収容所というテロルを用いて人間の自発性を破壊し、カオスを外部から組織して動かすことであった。人間が、自由で平等な市民という地位を自然の所与として自明視し、その地位を認め合う人間関係を蔑ろにし、私的利害の追求に没頭して競い合うとき、社会のアトム化は避けがたい。孤立した人間は、他者によって自らの存在意義を認められることができず、それを与えてくれるイデオロギーの誘惑に屈しやすくなる。人間の集団について言えば、カオスの状態は最も無力で、どんな秩序でも秩序でありさえすれば受け入れてしまいやすい状態である。自由な社会とは、人々が互いに干渉し合わない社会ではない。命令や強制ではなく、説得と合意に基づく人間関係が保たれて初めて、人間は自由でありうる。自由とは、個人が生まれながらに与えられている自然ではなく、複数の人間が相互関係において生み出す人為である。

(注)

(1)　シグマンド・ノイマン『大衆国家と独裁』(岩永ほか訳、みすず書房1998)、104頁。原著は1942年アメリカで出版。Sigmund Neumann, *Permanent Revolution*, Harper & Brothers, 1942.

(2)　アレントの著作からの引用は、本文中の括弧内に、著作の略号と頁数を記す。著作略号は以下の通り。

OT : *The Origins of Totalitarianism*, Harcourt Brace & Company, 1979[1951].

HC : *The Human Condition*, University of Chicago Press, second edition, 1998[1958].

BPF : *Between Past and Future*, Penguin Books, 1993[1968].

LM : *The Life of the Mind*, Harcourt Brace & Company, 1989[1978].

以下の邦訳を参照させていただいたが、筆者の責任で一部または全ての訳文を変更した箇所がある。

『全体主義の起源1，2，3』(大久保和郎他訳、みすず書房)

『人間の条件』(志水速雄訳、ちくま学芸文庫)

『過去と未来の間』(引田隆也、齋藤純一訳、みすず書房)

『精神の生活（上下)』(佐藤和夫訳、岩波書店)

(3)　ノイマン、前掲書、12-15頁参照。

(4)　例えばアレントは、市民的不服従に訴える人々は、共通の利害ではなく、共通の意見によって結び

つくのであり、その人々の一致協力した行為（concerted actions）は相互の同意（agreement）から生じ、その合意こそが共通の意見に信頼と確信を与えると述べている。Hannah Arendt, *Crises of the Republic*, Harcourt Brace & Company, 1972, p. 56.

(5) ノイマンは、ビスマルクによる統一以降のドイツでは、中産階級が政治的責任感を全面的に喪失し、政治意識を備えた市民層としてよりも、単純に経済的なブルジョワジーとして理解されると述べている。さらに第一次世界大戦の敗北（1918）と世界経済恐慌（1929）を経て、ドイツの中産階級の価値体系の核である「安定」が崩壊した。この中間層はワイマール政府に失望し、反議会主義や反資本主義などの革命的主張を掲げるナチスを支持した。つまり、プロレタリアの大衆組織のように自らを組織するのではなく、階級より国家に希望を託することを選んだのであり、ついには職業とパンと安定のために、独裁制を受け入れるに至った。ノイマン、前掲書、33-36, 42頁参照。

(6) アレントは孤立（isolation）と孤独（loneliness）とを区別する。人間は、他者との結びつきを失った孤立の状態でも、例えば芸術作品に見られるように、世界と関わり、世界に自己自身を表現できる。しかし労働力に還元された人間は、生命維持という必要（必然）のために活動し、他者とも世界とも結びつきを失う。これが孤独である。cf., HC, p. 212. ただし『精神の生活』では、孤独とは他者との交わりだけでなく、自己との交わりからも見捨てられていることと規定されている（LM-Ⅰ,74）

(7) 人種という概念は、民族（nation）という概念とも異なる。民族とは、自らを文化的・歴史的単位として意識する人々であり、人間の歴史的次元と不可分だからである（OT,229）。人種主義は、例えばロシア人とドイツ人との違いは、言葉や文化、歴史による違いではなく、狼と狐が異なるように、起源（生まれorigin）の違いであると見なす。従って人種イデオロギーは、「人類」という普遍的な概念を虚構と見なし、人類の一員である限りの「個人の尊厳」という概念を否定する（OT,234-235）。アレントが「大陸帝国主義」と呼ぶタイプの帝国主義は、この人種という概念を拠り所とする汎［人種］運動（pan-movement）と結びつくことによって、文化や歴史の共有に基づく国民国家という枠組みを越え、拡張していった（OT,223-224）。

(8) ノイマンもまた、戦争が自由主義、個人主義、合理主義といった言葉を空語に変え、社会行動の常識すら破壊し、暴力への信仰を育てたと述べている。ノイマン、前掲書、17頁参照。